

「人はつながって生きている」

2015年11月25日

埼玉県深谷市で、親子3人の間で起こった新聞、テレビ報道に本当に胸が痛んだ。81歳の母親は認知症になり、47歳の娘は介護のために退職した。母親は昼夜が逆転し、看病は大変で、娘は疲れ果てていた。74歳の父親は新聞配達をしていたが、病気になって仕事を続けることができなくなり、収入が途絶えた。父親は「いっしょに、死にたい」と言っていた。娘は両親を軽自動車に乗せ、利根川に突っ込んだ。途中で、車は止まり、娘は両親を下ろして、川の深みに進んだ。そこで、両親は亡くなった。母親に関しては「殺人罪」が、父親に関しては「自殺幇助罪」が適応される。娘は低体温状態であったが、一命を取り留め、上記のような話をしたという。河原に突っ込んだ轍の写真が大きく報道されていた。利根川の水は冷たかっただろう。家族の絶望感はどれほど深かっただろうか。家賃はきちんと支払われていたというから、律儀な家庭ではなかったか。孤立していて、「助けてください」と言える人はいなかった。こんな悲しい話があるだろうか。また、高齢の兄、妹が1ヶ月以上も誰からも知られず、亡くなっていたという悲報もあった。

ホームレスを支援している奥田知志氏と脳科学者の茂木健一郎氏が『「助けて」と言える国へ 人と社会をつなぐ』を上梓している。帯には「『傷ついた者こそが救い主になる』人はくつながらる力」で生きている」と書かれている。その通りだと思う。二人は諸々の事例をあげ、人間関係が荒廃している現状と、それからの救いを論じている。「おひとりさまの、孤独死がいい」と言う人もいるが、その人はお金があり、十分なケアを受けられる人であろう。上記の二つの事件は「助けて」と言えず、社会とつながる術もなかった。こんな社会であっていいのか。

二つのことを思う。人間関係が希薄になっただけでなく、個人情報保護法が言われるようになって、安否を聞くことさえできない状況にある。教会にも、家族のいない一人暮らしの人々がおられる。彼らが病気になっても、個人情報を理由に、病院は決して病状を話してはくれない。同性愛の人々が結婚を認めてくれという願望は理解できる。渋谷区は同性愛の人々を結婚と同等の間柄と認めることにしたが、大賛成である。二人は、生と死を共有できる関係を持ち得るからである。プライバシーというけれども、実態は丸見えにされている。監視カメラは日常生活を映し取っている。テロの多発で監視は強まり、自由が損なわれていく方向にある。政府に異を唱える意見を持つ人々への監視は、ますます強くなっていくだろう。政府はマイナンバーの導入に熱心だが、個々人の生活は政府に握られてしまうようになる。

もう一点は、貧富の格差である。憲法25条は「すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する」と謳っている。上記の二つの事件は憲法違反である。生きる権利を奪われ、自己責任と言わんばかりである。オリンピック・パラリンピックを開き、国威発揚を狙って、大金をつぎ込むようだが、その前に、貧しくさせられている人々の生きる権利を担保することが先ではないか。多くの国民の反対を押し切って安保関連法が強行採決されたが、米国の戦争に加担すれば、莫大なお金がつぎ込まれる。人殺しの戦争にお金を使うより、全ての人々が安心して生きられる社会基盤を作れば、言われずとも、この国を愛する思いは深まっていく。強い立場の者たちが思いのままに振る舞い、困難の中にある者を放置する国は内部から崩壊していく。預言者エレミヤが悲しみの中で体験した（南）ユダの崩壊は、この事実であった。